

ブタのお手伝い

東部小・3 天野 廉心

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんの家では、ブタを育てています。ぼくは、大きなとんしゃの中で、どうやってブタを育てているか気になっていたので、夏休みにブタのお世話を一日体験してきました。ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんの家にとまり、次の日の朝九時にとんしゃに着きました。とんしゃは、おじいちゃんとおばあちゃんの家から車で、二、三分のところにあります。

まず、ぼくとおばあちゃんは、一番はじめに中くらいのブタを起しました。中くらいのブタは、五十七頭いました。ぼくは、ブタが入っているさくをスコップで、

「カンカン。」

と、たたきました。一頭のブタが、人間が来たと思って動くと、後ろやとなりにいるブタがどんどん起きてきました。その後、カーテンを開けて、ブタたちに朝になったことを知らせました。

次に、ぼくは、お母さんブタと赤ちゃんブタがいっしょにいる部屋へ行きました。そこで、ぼくは、ミルクのこなと、こなミルクを水でといたえき体ミルクを子ブタ用のお皿に入れていきました。たまにお手つだいをしているので、子ブタのミルクのやり方はよく知っています。お母さんブタのえさと水は、ボタンをおすと自動のきかいで運ばれてきて、母さんブタせん用のえさ箱に入ります。ブタたちがいつせいにえさを食べ始めました。

次に、おばあちゃんとぼくで、えさが入る大きな台車を用意しました。外にある大きなタンクにはえさが入っています。おばあちゃんが、そのタンクからえさを台車に流し入れて、すごく重くなった台車を一番おくの部屋において持って行きました。この部屋のかいの中には、だいたい二十ぴきくらいの子ブタが入っています。そのかこいが、九つあります。ぼくは、一つ一つのかこいのえさ箱に、スコップでいっぱいになるまでえさを入れました。おばあちゃんは、大きなバケツで一回にたくさんのかこいのえさを入れていて、とても大変そうでした。そして、やっと、お母さんブタと赤ちゃんブタ、子ブタたちの朝のえさやりが終わりました。

まだ、おじいちゃんやおばあちゃんは、おとなのおすブタがいる部屋で、えさをやったり、部屋をそうじしたりしていました。全部の朝のえさやりやそうじが終わって、休けい時間になりました。

休けいの時、おじいちゃんが、

「一週間に二、三回は、ブタの出かがあるよ。」

と話してくれました。ぼくが、ブタのお手伝いをした日は、ブタの出かは、ありませんでした。出かに出すブタは、生まれて七、八か月たった中くらいのブタよりも少し大きなブタです。ブタ小屋からトラックのに台に乗せられ、とじょうという場所へ運ばれるそうです。運ばれたブタは、とじょうではたらいにいる人に引きわたされ、とじょうの中にかい体されて、肉に分けられるそうです。ブタを降ろしたトラックは、とじょうのすみできれいに洗います。帰るとちゆうに、トラックを消どくする場所もあるそうです。トラックはそこを通って帰ります。ぼくは、今ここにいてブタが連れていかれて、肉になると聞いておどろきました。

お昼になる前に、ブタのえさや水がなくなっていないかをもう一度かくにんしました。かくにんが終わると、ぼくたちは、いったん家に帰ってお昼ごはんを食べました。とんしゃの中は、とても暑かったので、ぼくはあせびつしよになりました。シャワーをあびて、服を着がえました。

お昼休けいが終わると、ぼくたちは、またとんしゃへ行きました。そして、朝と同じように赤ちゃんブタにミルクの粉とえき体ミルクをやりました。次に、おじさんとぼくで、ホースで水を流しておくの部屋のゆかをそうじしました。きれいになった部屋に子ブタを移動させました。さらに、台車のえさ箱を運んで、子ブタにえさをやりました。これで、ぼくたちの仕事は全て終わりました。

おじいちゃんとおばあちゃんは、ブタに赤ちゃんが生まれるように、注射をしたり、一頭一頭ブタの様子を見たりしていました。まだまだ、ブタの仕事は続くそうです。

毎日毎日、休みなく暑いとんしゃの中で仕事をしているおじいちゃんとおばあちゃんは、すごいなと思いました。そして、おじいちゃんとおばあちゃんが、一頭一頭のブタを大切に育てていることがわかりました。ぼくは、これからもお手伝いをして、おじいちゃんたちを助けてあげたいと思いました。ブタの世話のお手伝いを通して、ブタの命について考えることができました。